

## 看護学生の脈拍測定技術獲得の過程：指先の感覚に焦点を当てて

著者	福本 優子
著者別名	FUKUMOTO Yuko
雑誌名	感性と対話 = Senses & narratives
巻	4
号	2
ページ	69-74
発行年	2021
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1127/00000841/">http://id.nii.ac.jp/1127/00000841/</a>



Working Paper Plus

対話と記述

## 看護学生の脈拍測定技術獲得の過程：指先の感覚に焦点を当てて

### Process of Acquiring Pulse Rate Measurement Skills in Nursing Students: Focusing on Fingertip Sensation

福本 優子\*

Yuko FUKUMOTO

抄録： これまで、看護学生が触診技術を習得する際には、(1) 実際に人に触れることと(2) 教員が示す標準的なタッチをモデル化すること、の2つの重要なポイントが重要だった。しかし、2019年に始まったCOVID-19のパンデミックにより、非接触トレーニングが標準になり、人々に「触れる」ことが困難になった。そこで、2021年10月の脈拍測定演習では、学生が自分で「触る」ことを体験できるようにすることを目的に、学生の自発性を引き出す新しい教授法を試みた。まず、これまでのように標準的な手技を学生に示すのではなく、まず自分で指に触れるように促した。このような課題提起を続けた結果、学生の自立が進み、教科書と同様の手技に近い手技を、学生が自ら見いだすことができた。看護技術習得の支援方法として、自分の感覚を自覚し、自分の行動を振り返ることを奨励することが、重要だと考えられる。

Abstract: In the past, when Japanese nursing students learned palpation skills, two key points were important: (1) actually touching the person and (2) modeling the standard touch shown by the instructor. However, with the pandemic of COVID-19 starting in 2019, non-contact training have become the norm, making it difficult to "touch" people. Therefore, for the pulse measurement training in October 2021, I developed and introduced a new teaching method that would elicit students' spontaneity, with the goal of allowing students to experience "touching" on their own. First of all, instead of my showing the students the standard procedure first, as I have done in the past, I first encouraged them to touch their own fingers by themselves. As a result of my continuing to raise issues in this way, emphasizing the students' independence, the students found on their own a form of a procedure similar to the one in the textbook. As a method of supporting students in acquiring nursing skills, encouraging them to become aware of their own senses and to reflect on their actions is effective in nursing education.

[感性と対話 Senses and Narratives 4(2) 69-74, 2021]

キーワード： 看護学生、脈拍測定、技術習得、自発性、触覚。

Key words: Nursing students, pulse measurement, skill acquisition, spontaneity, tactile sensation.

\* 日本赤十字九州国際看護大学 y-fukumoto[@]jrckicn.ac.jp

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

## はじめに

看護師にとって手は重要であり、ケアとして触れるタッチング、コミュニケーションや援助としての意図的タッチのみならず、フィジカルアセスメントの過程で触診を行う上でも必要である。ケアとしてのタッチングや意図的タッチについて、看護学生は演習や実習を通して学ぶこともでき、これらに関する研究は看護の中でも行われており、知見を得ることは可能である。一方、触診の技術を習得するにあたり、看護学生の触覚に焦点を当て、介入を行った看護教育や看護における研究は前者と比較するとはるかに少なく、初学者に触診技術を教えることは容易ではない。そこで、筆者が看護学生に脈拍測定技術を教える過程での気づきや発見を一部紹介する。

### 1. 看護教育で看護学生の手の感覚に着目する

#### 1) ICT 活用だけでは「触れる」ことが困難な看護教育

平成 29 年（2017 年）3 月に小学校及び中学校の学習指導要領が、平成 30 年（2018 年）3 月に高等学校の学習指導要領が改訂され、「情報活用能力」が、言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」として位置づけられた。この改定により、ICT（Information and communication technology）を活用した教育が行われるようになり、遠隔教育の推進が現在進行している。文部科学省（2019）によると、ICT を活用した遠隔教育は、多様性のある学習環境や専門性の高い授業の実現など、質の高い学習の実現に資することが期待されているという。村上（2020）によると、ICT による学習効果は、学習の意識を高める、知識を身につける、理解を深める、イメージを明確化する、実践力を高めるという 5 つあるという。昨今、看護教育において e ラーニングや VR 学習、講義の動画配信など ICT の活用が進み、学生は観て、聴いて、考えるという学習する機会が ICT 導入以前と比較し多くなっていると考えられる。しかし、村上（2020）は、実践力を高めるために自己の技術の客観的な把握が効果的であり、そのために適切な ICT が活用される必要があることや、授業設計の工夫が必要であると述べており、ICT を活用した教育のみでは、看護に必要な相手に触れて、感じて、アセスメントするという過程を経ることは難しいことを示唆している。看護において、自分の手で患者を観察し、痛みがどの部位なのか、熱感があるか否か、圧痛や浮腫の有無を観察することは、適切な治療につなげるための重要な技術といえる。

#### 2) 触れる側の触覚とは、教育方法とは

山本ら（2014）はタッチングについて、呼吸困難感のある終末期がん患者を対象にタッチ療法を行ったところ、呼吸困難感が低下したことを科学的に証明している。加えて、白土（2013）は、心を込めて触れる場合とそうでない場合による脳反応を fMRI を用いて比較しており、心を込めて触れると、右半球の第一次体性感覚野で優位な高値を示し、心を込め人の

肌に触れることが、安心感と皮膚感覚の感受性を高めることにつながると述べている。このように、触れることの効果は科学的にも証明されており、看護実践における触れる技術の向上は患者の安楽を促進する上で重要である。しかし、看護基礎教育において、看護の初学者を対象に触れるときの看護者の感覚に関して研究されたものは見当たらず、触覚から看護教育を検討されているものは見当たらない。昨今、看護教育の観察場面でも、手で触れる、観る、看ることが容易ではない状況も起こっている。いかなる状況でも、看護の基本となる手で触れて学ぶことができるように、教育方法の検討が必要と言えよう。

### 3) 看護初年次教育に触覚からアプローチする

守山ら(2020)は、看護師にとって手の働きは重要であり、触れる技術としてのタッチは看護の基本技術と位置付けられると述べ、看護の初学者に「手で対象に触れ感じ考えることの意味」をどのように教育するかという疑問に対し、初年次学生を対象にプチプチを用いて試みており、学生は、手の感覚から感じる人への対応を体感しており、人の温かさやグローバルに活躍するなど、予期しえない感情が生じていることが分かったという。このことから、手の感覚に着目し研究することは、看護技術の向上のみならず豊かな人間性を育むことにつながると考えられる。

### 4) 看護技術を体得し、看護職として継続していく

片桐ら(2016)によると、新卒看護師の離職理由に看護の実践能力の不足があるという。特に新卒3か月目で離職願望がある看護師のリアリティショックが高いといい、それは基礎教育終了時点の能力と臨床現場で求められる能力に大幅なギャップを生じていることを示している。離職防止のためにも看護実践能力の獲得および向上することは必要であり、学生に自信をもってできる看護技術が一つでももって卒業できるように看護教育方法を見直し、学生自らが体得できるアプローチを検討し、実践していかなければならない。

## 2. 脈拍測定演習の中で看護学生が触知することの難しさ

### 1) 教える体験と学生の反応から教育手法を考える

演習を受けるまで脈拍測定をしたことのない看護学生に対し、筆者は毎年教科書通り、原理原則に基づき、「三本の指をそろえて橈骨動脈に指を添わせませす。」と実施しながら教えていた。それでも看護学生が「脈が触れません。」というのが筆者は不思議でならなかった。単なる脈拍に触れるという手技の問題なのか、その学生の感覚の問題なのかとさえ戸惑うこともあった。筆者は学生と一緒に触れることをして、「ここに触れますよ。」と伝え、「こんなものなの?」「このかすかにぴくぴくするものですか?」と学生は驚きながら脈拍に触れる体験をしていた。

一方、脈拍を測られる側の学生からは「先生から触れるのは全然違う。」という声をよく耳にしていた。指の圧の問題なのか、学生は指を添えることはできるが、触知に必要な指先

の力加減がわからないということなのか、ということに気づいた。そこで、筆者は指先の触知にどのくらいの圧がかかっているのか調べ、客観的にその数値を目安に指先に圧を加えて脈拍を測る練習をしたらよいのではないかと考えた。しかし、脈圧は測定する対象者によって異なるため一般化することは困難である。ましてや看護の初学者にとっては教科書に載っていない数値を目安に練習すると混乱を招くおそれもあると考え、数値化する方法ではなくほかの教育方法がないかと思いつまった。

## 2) 自ら体感して学びを得る教育に気づく

2019年初旬より新型コロナウイルスのパンデミックにより、それまで当たり前であった看護学生の演習や実習の教育方法が大きく変化した。衛生学的手洗い、手指消毒は当然ではあるが、できるだけ非接触型の演習・実習となったことで、相手に「触れる」ことがより困難となった。新型コロナウイルスが流行する以前より、看護学生が患者にあまり触れていないということに筆者は疑問と違和感を覚えていた。ここでの触れるは「タッチ」「タッチング」の意味合いではなく、「触知」「触診」「触れて見る」のことである。非接触の中で看護学生に教育していくことにますます「触れる」ことができない看護師が増えていくのではないかと不安を覚えた。実習指導で患者に触れるとき、学生の手を持ち、「こうやって触れる。」ということと一緒に実践することがあったが、それさえも困難な教育場面に直面し、「触れる」ことをどのように伝えていけばよいのか見つめなおす機会となった。

コロナ禍でも対面の授業がかなわなくてもオンライン授業の中で、学生への「問い」と身近なものでよりシンプルなものからでも触覚を用いて学ぶことができるということを知った。問題提起された学生の感覚や沸き起こる感情、行為、思考を、学生自身が意識して知ることは、学びやその後の行動変容をも期待できると思え、触知する意味での「触れる」ことを伝えられるのではないかと感動を覚えた。そして、脈拍測定で学生が触れることができるようになるためには、自分の手や指の感覚を、自分自身がわかるという体験することが必要なのだと筆者の中で腑に落ちたのである。

## 3) 看護学生が自由に脈拍を感じ、測定方法を自ら学ぶ

2021年10月、脈拍測定の演習の際、「触れる」ことを学生自ら体感してもらうにはどのようにしたらよいか、筆者の伝え方（教え方）に変化があった。

まず、従来のように「脈拍測定とはこのようにします。」というように手技から伝えることをやめ、「自分の指を指で触れてください。」「左右の指は同じ感覚ですか？」と発信してみた。看護学生は「指」に意識が集中した状態となり、その状態のまま筆者が「脈拍を触れてみてください。」と促すと自身の橈骨動脈に触れだした。その手技を咎めたり否定したりすることはせず、「どのように感じますか？」と問い、触れた感じを言葉にしてもらう。教科書にある手技として誤っている場合でも、「その指を添わせた時とほかの人（学生）が添わせている方法でやったときではどうでしょうか？」と伝えると、学生ははっとした様子で、「こっち（三本指）の方がいいです。」と話しながら自分の橈骨動脈を触知しなおす状況であった。

「では、なぜそちらの方（教科書の手技）がいいですか？」と問うと、「よく触れる.」「触れる表面積が広い.」「指全体でカバーできる.」という声が聞かれ、学生は教科書通りの手技やそれに近い状態となった。この状態で教科書に戻ると、学生にも頷きが見られ、自身で脈拍測定方法を体得し、振り返ることができていた。

筆者が担当した看護学生は、例年のように「母指」で測定することはなく、自身の指に意識を集中させ、加減を見ながら「触れる」ことができており、これこそ学生自ら体得した技術と言えよう。

### おわりに

今回、看護学生の脈拍測定の演習を通しての気づきを紹介した。看護学生にとって触知する意味での「触れる」ことは、身をもって体感し、看護技術の獲得にもつながった。看護技術を獲得するための支援方法として、自らの感覚に意識を向け、その行為を振り返るように促すことも、看護教育においては有効であることを実感できた。その技術を用いて対象者に「触れる」ことができるように今後も支援していきたい。また指示する教育ではなく、発問内容を考え発問する、反応を待つ、という学習者主体の教育の在り方を見直す機会となった。今後も学習者の感性へ問うことも看護教育者に求められることを忘れずに演習・実習指導に携わっていきたい。

### 謝辞

今回執筆にあたり、守山正樹先生から多くのご助言をいただき、日々行っている看護技術演習での教育に活かすことができました。心よりお礼申し上げます。また、How to ではない演習方法におや？と立ち止まりながらも、一緒に楽しんでくださった学生の皆様に感謝いたします。

### <文献>

- 文部科学省. (2019). 文部科学省白書. 第2部/文教・科学技術施策の動向と展開, 第11章 ICTの活用の推進, 文部科学省ホームページ
- 村上大介. (2020). 看護基礎教育におけるICT活用と効果に関する文献検討. 日本伝統医療看護連携学会誌, 第1巻第1号, 77-81.
- 山本敬子, 前田節子. (2014). 呼吸困難感のある終末期がん患者へのタッチ療法の意義: フットリフレクソロジーにおける予備的研究. 昭和大学保健医療学雑誌, 第12号, 63-72
- 白土真紀. (2013). 触れる行為の認知脳神経科学的検討. 日本生理人類学会誌, 18(1), 54.
- 片桐麻希, 坂江千寿子. (2016). 新卒看護師の離職理由と就業継続に必要とされる支援内容に関する文献検討. 佐久大学看護研究雑誌 8巻1号, 49-59.
- 守山正樹, 鈴木清史. (2020). 指先の触覚から看護の意味と人間性を考える試み; プチプチから始めるタッチの初年次教育. 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 第18巻, 1-12.

